

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集

令和3年度 第1回 ～「海」～



はじめに

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、丸山薫賞の運営委員として丸山薫の業績の顕彰と普及に取り組み、本市の文化振興にご尽力された「故 神野信郎氏」によるご寄附を財源に、今年度新しく創設いたしました。

この「帆・ランプ・鷗」賞は、子どもたちに詩を身近に感じてもらい、詩を書くきっかけとなつてほしいとの願いから、「はじめり」という意を込め、丸山薫の第一詩集より命名しました。

記念すべき第一回目として、丸山薫がこよなく愛した「海」をテーマに、全国の小学生、中学生、高校生を対象に作品募集を行ったところ、全国から数多くのご応募をいただきました。その詩の一つ一つが心象風景として心に残る力作揃いとなつており、創設した意義を改めて実感しているところです。

この作品集には、「帆・ランプ・鷗」賞、優秀賞及び佳作の作品を掲載しております。入選されました皆さまには心よりお祝い申し上げます。また、この作品集を手にとられた方にも、ぜひ、子どもたちが言葉に表した様々な想いを感じていただければと思います。

今後もこの賞をきっかけとして、全国の子どもたちに、豊橋ゆかりの詩人・丸山薫を知っていただくとともに、詩を書くことを通じて豊かな感性や表現力が生まれ、詩に親しむ文化が広まるよう、期待をしております。

最後に、この賞の創設にあたりご協力いただいた丸山薫賞運営委員会の皆さま、ならびに、審査にご尽力いただいた選者の先生方に心からお礼申し上げますとともに、ご応募いただいた皆さまの今後益々のご活躍をご祈念申し上げます、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和四年一月二十二日

豊橋市長 浅井由崇



目次

はじめに

【小学生の部】

入選作品	選者	八木 幹夫	6
選評			22
選者作品			25

【中学生の部】

入選作品	選者	新藤 涼子	29
選評			36
選者作品			38

【高校生の部】

入選作品	選者	高橋 順子	41
選評			47
選者作品			49

丸山薫の略歴と業績



【小学生の部】

選者

八木

幹夫



「帆・ランプ・鷗」賞

笑った海

愛知県蒲郡市立中央小学校
三年生 星野 佑佳

優秀賞

ぼくと海

愛知県豊橋市立福岡小学校
二年生 しが ゆうた

遠い海

愛知県豊橋市立福岡小学校
三年生 夏目 空風

海のうた

静岡県浜松市立東小学校
二年生 あがた ひかる

小さな出会い

愛知県新城市立鳳来中部小学校
五年生 本田 天翔

たこのまち

愛知県豊橋市立牛川小学校
三年生 本多 さくと

佳作

表はま海岸で出会った海

愛知県豊橋市立栄小学校
三年生 浅野 万由

海

愛知県豊橋市立栄小学校
五年生 竹中 蒼空





青い季節

愛知県豊橋市立栄小学校

六年生 大久保 優

魚になったぼく

愛知県豊橋市立栄小学校

六年生 横松 暖大

きらきらのうみ

愛知県豊橋市立旭小学校

一年生 にしまえ くるみ

海のなぞ

愛知県豊橋市立旭小学校

四年生 岡本 れん

海はまるで

愛知県豊橋市立旭小学校

五年生 小坂 瑠那

きれいなかい

愛知県豊橋市立旭小学校

三年生 にし村 はんな

波がきたら

愛知県豊橋市立福岡小学校

五年生 金光 結那

海

愛知県豊橋市立栄小学校

六年生 村田 結



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

笑った海

愛知県蒲郡市立中央小学校

三年生 星野 佑佳

みんなで 海を 見に行った

みんなで顔を見て 大笑いした

妹のゆきちゃんが 波をとびに行った
私も一緒にとんだ

見ていたお母さんとおばあさんも
笑った

とつぜん 大きな波が来た
ゆきちゃんが ころんだ
たすけようとした 私も
ころんだ

近づいて行くと お母さんとおばあさんは
もっと笑った
海を見に行つて
みんなで 笑った 笑った

かけつけた おじいさんも
すべつてころんだ
ゆきちゃんをだこうとしたお父さんも
大波にころばされた
みんなぶぬれで 砂だらけだ

夕日のしずむ海で
笑った
長いかげの手が つながった
かげも 笑っているようだ
また みんなで 海を見に行きたいな

優秀賞

ぼくと海

ぼくは海が大好きだ
夏が来るとウキウキする

しおひがり

かにとり

魚とり

海の中で大はしゃぎ

あそびたいことがたくさんある

海のアソビは楽しい

あそんでも あそんでも

あそびたりないくらい

楽しいことがたくさんある

あそびつかれて空を見ると

海とぴったりくっついて

にじんでとけていくようだ

ときどき

海と空の間を

船がゆっくり動いていく
どこの国へいくのだろうか
何を運んでいるのだろうか

ふと、そんなことをぼんやりと考えて
思い出したように

ぼくはまた海の方へ

りよう手を広げてすなはまを走る

太陽の光をうけて

海がキラキラ

波でぬれたすなはまがキラキラ

水でぬれたぼくもキラキラ

あたり一面が

金色にかがやく

海風にふかれて

いつまでも

ぼくは

夏の中を走りつづける

愛知県豊橋市立福岡小学校

二年生 しが ゆうた

遠い海

愛知県豊橋市立福岡小学校
三年生 夏目 空風

海はどこまであるのかな
遠くの空までつながっているのかな
地きゅうのうらまでふかいのかな
コロナウイルスで遊びに行けない夏休み
海に行ったことのないほくは
へやのまどから空を見たら海に見えてきたよ
大きな魚をつりたいな
大きくわらってつった魚を食べたいな
風がはこんだなみでサーフィンをやりたいな
すなはまでぼくより高いおしろを作りたいな
海の中の空を魚といっしょにとびたいな
貝がらを耳にあてて夏の音をききたいな
船にのってほかの国のけしきを見たいな
太陽の光できらきらしている海のほう石を
見つけたいな
くもといっしょに泳ぎたいな
大きな花火を空にうち上げて
海のかがみにうつしたいな

イルカとクジラとおしゃべりしたいな
なみの音で歌を歌いたいな
イルカといっしょに山よりも高くジャンプ
したいな
そんなことを考えていたらお母さんの声が
聞こえてきた
「兄ちゃんプールに弟と入っておいで」
庭のビニールプールが今はほくの海だ
おもちゃの魚がおよいでいる
なみはほくが作るんだ
キラキラほう石みたいできれいだな
弟と水でつぼう楽しいな
その日の夜かぞくで花火もしたよ
コロナウイルスで本当の海は遠いけど今は
ほくの海でがまんしよう
広くて大きな本当の海を楽しむに

海のうた

海は何でも知っている
いのち生まれたその日から
恐竜生まれてもぐったよ
魚が生まれてもぐったよ
人が生まれてもぐったよ
何にも言わずにザーザーと
波をよせるのくりかえす

海は何でも知っている
人が生まれたその日から
じいじ生まれてもぐったよ
ばあば生まれてもぐったよ
パパママ生まれてもぐったよ
何にも言わずにザーザーと
波をよせるのくりかえす

海は何でも知っている
いのち生まれたその日から

大きい生き物もぐったよ
小さい生き物もぐったよ
中くらいのももぐったよ
何にも言わずにザーザーと
みまもりがかり
見守り係くりかえす

静岡県浜松市立東小学校
二年生 あがた ひかる

小さな出会い

愛知県新城市立鳳来中部小学校
五年生 本田 天翔

夏の暑くなる少し前、海へおひるごはんを食べに行った。

おひるを食べたあと、海岸へ遊びに行った。

海岸は、海開き前でいろんな物が落ちていた。まるで宝物さがしみたいでぼくは、走りまわっていた。

遊んでいると、小鳥がつり糸にからまっていた。

よく見ると口から糸が出ていてぼくは、つり糸を、のみこんでいるんだ、とすぐに分かった。お父さんと呼んで落ちている石でお父さんが糸を切った。

そして落ちているバケツに小鳥を入れてみよういんをさがしに行った。

びょういんをさがしに行くとつりばりをおくまでのみこんでいて、先生が

「無理に取ると、小鳥が死んでしまう」と言われた。

お父さんとお母さんは相談してできるかぎり糸をみじかく切って、もといた海岸に返すことにした。

海岸につくと、日がしずみかけていた。

小鳥をにがすと元気に走って行った。ぼくは、ゴミだらけの海岸で、海にしずむ

キレイな夕日を見た。

たこのまち

愛知県豊橋市立牛川小学校
三年生 本多 さくと

あつ！たこがたまごをうんだ！

たこのまちはたこだらけ
たこの家はこんぶや岩でできている
たこの学校があるのにたこはほほいらないんだ
たこはともだちがいないんだ
たこのまちはしずかなんだ
たこのまちはたこはそんなにいないんだ
なぜならつりのほりにかかるから
たこのまちはたこつりのほりにかかるな
たこのまちは海に10こはあるんだ
たこのボクシング大会があるんだ
それいがいなにもないんだ
たこのボクシング大会でたたかうのは
つりざおのほり
がんばれがんばれ
たこたこがんばれ
そしたらきつとたこのまちはたこだらけ
なかまがいっぱいいたこのまち



佳作

表はま海岸で出会った海

愛知県豊橋市立栄小学校
三年生 浅野 万由

海に行ったら、ビニールぶくろなどのゴミが
少しあったし、今海では、プラスチックがたく
さんがされて来ているから、ゴミがない海だ
と、生物もうれしいし人もうれしくなるので、
思いつきました。

広い海

ゴミはすてずに

きれいにね

きれいな海は

みんなうれしい

はじめは、そんなになみが高くなかったけれ
ど、だんだん高くなって、それがたくさん来て
くつがぬれて、びしゃびしゃになってしまつて、
拾いたい貝がなみでながされて、またながれて
来たから思いついた詩です。

高いなみ
たくさん来たぞ
びしゃびしゃだ
貝がながされ
またながれつく

貝がらを拾っていたら、花もよりの貝がらや
しましまもよりの貝がらもあったから、思いつ
いた詩です。

貝がらは
いろいろあるぞ
楽しいな
しましまもようや
めずらしいがら

海

空からこぼれ落ちる
空のこども 雨

空の青さと
ぼくが見ていた
かがやいている八月の海
すなと水がまじりあって遊んでいる

海までの道
足のうらに
ふれる
貝がら
すなのかげら
銀色の波
海のおい
楽しくって
まぶしかった昼の終わり

たぶん
もうしばらくこない
金色の海
たぶん
もうしばらくこない

金色の海
さみしいぼくの
まぶたに
ふれる
きらめく波が
バイバイまたねって
いった気がした

愛知県豊橋市立栄小学校
五年生 竹中 蒼空

青い季節

夏がくると想いかぶ

青くて広くてどこまでも続いている海

みんな笑顔で波と追いかけて

追いついたと思ったら去っていく波

でも、またすぐせまってくる

そんなくり返しが楽しくて、ついついもつと

遊びたくなっちゃう

波の音を聞きながら目をつぶってみる

体がゆらゆらする感じがする

ザブーン・・・ザーツという音に心が落ちつく

お母さんに小さいころ、おなかにいた時の音と

波の音は似てるんだよって聞いたことがあるけど、本当にそうなのかもしれない

みんなが好きな海

みんなを笑顔にしてくれる海

世界がつながる海

来年も、これからもずっと、夏たくさん楽しませてもらえ

ね。

愛知県豊橋市立栄小学校
六年生 大久保 優

魚になったぼく

愛知県豊橋市立栄小学校
六年生 横松 暖大

「あれ、なんだ？」

朝起きるとぼくは魚になっていた

おどろいたがおなかはペコペコだ

朝ご飯をさがしに出かける

するとつぜんギザギザのするどい歯をした

サメが目の前にあらわれた

ぼくは必死ににげた

なんとかにげるとまたご飯をさがしはじめた

しかし次はぼくの二十倍もある大きなくじらが

大きな口をあけて近づいてきた

死にもものぐるいで泳いでにげた

ぼくはとてもおなかですいていた

ようやくご飯を見つけると、周りを警戒しながら

らこそこそとご飯を食べた

辺りが暗くなり夜がきた

とてもつかれたぼくは海草にかくれて眠った

次の朝、目が覚めるとぼくは人間にもどって

いた

「あーよかった！」

ぼくはほっとした

きらきらのうみ

うみはきれいです。きらきらしてて、おさと
うみみたいです。いろんなおさかなもいて、にぎ
やかです。わたしもおさかなになって、いつし
よにおよぎたいです。さんごしょうをみたり、
いろんないろのおさかなのむれをみたいです。
きつとにじみたいで、きれいだとおもいます。

なつのうみは、なんだかわくわくします。う
みは、いろんないろがあります。しろとかみず
いろとか、いろんないろがあります。いしみた
いなかいながらあります。

かいがらがしは、なんだかたからさがしみ
たいです。ほしはそらにあるけれど、うみにも
いっぱいおちています。そのほしを、ねっくれ
すにしたいです。そうしたら、なつのうみのお
ひめさまみたいなきぶんになれそうです。

愛知県豊橋市立旭小学校
一年生 にしまえ くるみ

海のなぞ

愛知県豊橋市立旭小学校
四年生 岡本 れん

どんな魚がいるのだろう
大きい魚小さい魚ちがいはあるのかな

色は何色だろう

赤色 青色 それともにじ色かな

どんな風に泳ぐのかな

スイスイ泳ぐのかな

息はどうやってするのだろう

息をしたらプクプクあわがでてくるのかな

海には何びきくらい魚がいるのかな

何百びき何千びき

魚い外にはどんな生き物がいるのだろう

貝 カニ ヒトデ サンゴ クラゲ

海のふかさはどれくらいだろう

ぼくの身長くらい

ビルの高さくらい

海の広さはどれくらいだろう

ずっとながめていてもおわりがみえない

そんな海をながめていると心がおちつく
ザーザーうちよせる波

海の上を飛ぶカモメとても気持ちよさそう

ほくもカモメみたいに大きな海の上を飛んで

みたい

海はまるで

海は広い
まるでいろんな
国々をつなぐ
橋のよう

海は青い
まるで澄んだ空の青が
鏡みたい
うつつたよう

海は深い
まるで終わりが
ないものに
挑戦し続ける
人生のよう

海は生きて
いる
まるで何にも
負けず
波をたてて
いる
生き物のよう

広く
青く
深く
生きて
いる
海のように
個性あふ
れる
自分にな
りたい

愛知県豊橋市立旭小学校
五年生 小坂 瑠那

きれいなかい

うみには、かい
いろんなしゆるいのかい
うごいたり、とまったり
きれいなかい
光って、光って、
光って、光って、
いろんな色にかわるかい
ずっとずっときれいでじゆうなかい
光って、うごいて、じゆうなかい
みんな、みんな生きているかい。

愛知県豊橋市立旭小学校
三年生 にし村 はんな

波がきたら

波がきたら
塩のかおりがきて
クラゲは流れ
わかめも流れ
貝はころがり
砂はのまれ
物は流れ
人は楽しむ
波はこれだけ
たくさんのが
できてしまう

愛知県豊橋市立福岡小学校
五年生 金光 結那

海

海はきれい

青く輝く海

石 貝がら さんご

宝石のようにきれいな海

海は広く大きい

どこまでもどこまでも続く海

中国 アメリカ オーストラリア

他の国と国を繋ぐ海

海は楽しい

暑い夏の日海に来る

海水浴 サーフィン ビーチバレー

夏を満喫できる海

海はおいしい

おいしい物があふれる海

海老 鯛 鮑

食卓を笑顔にする海

海は怖い

危険な生き物もたくさんいる海

くらげ 鮫 うつぼ

襲われると一溜まりもない生き物がいる海

海は悲しい

命だっておとってしまうことのある海

溺れる 漂流 津波

人が時に悲しんでしまうことのある海

海は人と繋がっている

人を繋ぐ青く広い大きな海

海の生き物 人 国

色々な物を繋ぐ海

愛知県豊橋市立栄小学校

六年生 村田 結

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

笑った海

星野 佑佳

海を見に行つてこれほど幸せな気分になることは人生でもまれなことです。読者も幸せな気持ちになります。妹が波を跳ぶときに転んだことがキツカケで次々に佑佳さんもおじいさんもお父さんも波に転ばされる。それを見ていたおばあさんもお母さんも笑った。みんなも笑った。「長いかげの手が つながった／かげも 笑っているようだ」。作品には楽しさを伝える心地よいリズムがあります。家族の黄金の時間を象徴している美しい詩です。

優秀賞

ぼくと海

しが ゆうた

夏の海を表現して生き生きとしたしがさんの姿が見えます。浜辺で寝転んで空と海を見る。空と海がくつついてにじむ。船がゆっくりと動く。ぱつと起きたして砂浜を走る。静と動の鮮やかな描写が見事です。

遠い海

夏目 空風

コロナ禍でどこにも行けない夏目さんは「海」を夢想します。サーフィンや釣りや外国旅行や花火やイルカやクジラとお喋りすることなど。お母さんの声に我に返ると庭先に海の代わりのビニールプール。我慢するか。もうすこし。

海のうちた

あがた ひかる

繰り返しのリズムのために何万年も何億年も繰り返す波の音が聞こえてくるようです。太古から海は生物のことを何でも知っています。波は浜辺に今日も。全ての生命を見守っている海。「もぐったよ」が面白い表現です。

小さな出会い 本田 天翔

海辺で弱っていた小鳥。飲み込んだ釣針を取るために病院でレントゲン検査までしてあげる。ゴミの多い海岸。できる限りの処置をして夕日の海岸に再び離すと元気に帰って行った小鳥。ゴミと海に沈むキレイな夕日。考えさせられますね。

たこのまち 本多 さくと

たこがあちこちから顔を出してきそうな作品です。釣針にだまされるな。卵がたこのまちにはいっぱい。人間の仕掛けの釣針とのボクシング。引っかかったら、たこの負け。勝つたらいつきに増えるたこの卵。見てみたい。

佳作

表はま海岸で出会った海 浅野 万由

ゴミは海の生物に深刻な危機をもたらしています。気候変動も大変なことになっていますね。ようやく世界の首脳陣が動き始めました。

海 竹中 蒼空

素足にふれる貝殻や砂。銀色の波と海のおい。海にはすぐには来られない。海との別れが名残惜しい。きらめく波が美しい。

青い季節 大久保 優

夏の海を青い季節と表現しました。お母さんのおなかにいた頃の心音と波音は似ている。目をつむると揺れるようです。

魚になったばく 横松 暖大

魚になった夢。海の中は弱肉強食。海草と一緒に眠っている間に食べられたかもしれない。サメやクジラの巨大な口。夢で良かった。

きらきらのうみ にしまえ くるみ

海底に落ちている星をひろってネックレスにするとお姫様みたいな気分になれる。きらきらの海。想像がうつくしい。

海のなぞ 岡本 れん

海の中にはまだ人間の知らないことがいっぱい。海の広さも果てしない。限りないなぞ。カモメになつて飛んでみたい蓮さん。

海はまるで 小坂 瑠那

海は世界をつなぐ橋、空を写す鏡、果てしないものに挑戦する人生。海に囲まれた日本は世界とつながる。個性的に生きてください。

きれいなかい にし村 はんな

貝が様々な光を放つて自由に生きている様子。そこに海の生命感と海岸の広がりを感じます。波に揺れる貝の姿がキレイですね。

波がきたら 金光 結那

簡潔ですが波そのものを描いてリズムがあり、海の様子が目の前に浮かんできます。「人は楽しむ」という表現が生きています。

海 村田 結

海の多様性を描いています。海には悲しいこともあれば、うれしいこと、おいしいこともあります。人とは切り離せない関係ですね。

選者作品

海豚

八木幹夫

海のぶた
だなんて
イルカよ
イルカよ
ごめんね
あまりにもひどい命名だ
その愛くるしい鳴き声
そのつぶらな目
つややかな皮膚
水中をいっきに加速し
空中に躍り上がる力は
水の妖精といった方がいい
イルカよ
ニンゲンと遊び回って
水虫なんかうつされるなよ

詩集『川・海・魚等に関する個人的な省察』より
(砂子屋書房刊)二〇一五年

【中学生の部】

選者

新藤
涼子



「帆・ランプ・鷗」賞

水平線

愛知県豊橋市立吉田方中学校
一年生 伊藤 嶺

優秀賞

海の色

愛知県豊橋市立吉田方中学校
二年生 大林 法慎

カモメと海

愛知県豊橋市立吉田方中学校
三年生 赤沼 奏空

佳作

海へ

沖縄県糸満市立三和中学校
三年生 平田 永愛

海といたら

愛知県豊橋市立吉田方中学校
一年生 藤城 太希

アイスを奪われた

東京都町田市立薬師中学校
二年生 前岡 里奈

海とは

大阪府寝屋川市立第九中学校
三年生 川崎 愛弓



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

水平線

愛知県豊橋市立吉田方中学校

一年生 伊藤 嶺

海を見ると必ず水平線が見える

その水平線はどこまでも続いていて

とても不思議である

一本の線なのに輪っかのように

まるで皆をだましているみたいだ

海を見ると必ず水平線が見える

その水平線は空と仲よしに見える

いつもいっしょにいて

あざやかで純粹な

青いグラデーションをつくっている

まるで僕たちの心を

癒しているみたいだ

海を見ると必ず水平線が見える

その水平線はまるで

波のお母さんみたいで

いつも富士山のような

勇ましくて堂々した

波をつくっているように見える

海を見ると必ず水平線が見える

その水平線の向こうには

たくさんの町があつて

たくさんの事が今日も起きている

水平線は本当に謎だらけだと

いつも思う



優秀賞

海の色

愛知県豊橋市立吉田方中学校

二年生 大林 法慎

海は青い
青い空が映ってる

海は赤い
真っ赤な夕日が沈んでく

海は黄色
十五夜の満月が揺れている

海は白い
大きな波が真っ白いしぶきをまといてる

海は緑
たくさんの命の源 海の森

海は黒い

どんな闇夜のみこんで

海は虹色
世界中のみんなの笑顔が映ってる

カモメと海

愛知県豊橋市立吉田方中学校
三年生 赤沼 奏空

冬の朝

僕は単線に揺られながら
車窓の向こうに広がる
海原を眺めていた

静まり返った海原の上を

カモメの群れが

時に重なり

時に距離を広げながら

気持ちよさそうに

飛んでいる

まるでどこかへ行こうと

僕を誘っているかのようだ

でも僕は上手く答えられず

言いかけた言葉を

そのまま飲み込んだ

地平線まで続く海原は

かすかに波立ち

僕に絶え間なく

エールを送ってくれる

いつかその時が来たら

ぼくも自由に飛んでみよう

広い海原を

力強く翼を広げて

佳作

海へ

沖縄県糸満市立三和中学校
三年生 平田 永愛

家族で海にいったことがある。
父にだっこしてもらって、
私の足がつかないところまでいった。
不思議な安心感。
静かで、温かかった。

父と釣りでいかだにのったことがある。
海をのぞいて、
落ちたら、戻れないと思った。
不思議な恐怖感。
はしゃぎながら、こわかった。

空をみる。
広い広い。
どこまで空があるのか。

海をみる。
広く広く。
どこまで海は続くのか。
もしも、苦しくなったら、

海へ行こう。
潮のにおいはくさいし、
砂は足にまとわりつく。
それでも、
風は、吹くのだろう。
私を吹きぬけ、
砂浜を吹きぬけ、
海を吹きぬける。

冷たくて、
どこか温かい。
息を吸って、
そっと吐いて。

海へ行こう。
誰も知らない、
海へ行こう。

海といたら

愛知県豊橋市立吉田方中学校

一年生 藤城 太希

海と連想したらいろいろなものが浮かぶ
海と言ったらスイカ割り
スイカ割りみんなの声がいっせいに
パニックをおこしてしまう
それはだれかがわるいわけではない。
みんなが楽しんでいるからだ。

海と言ったらバーベキュー
波の音を聞きながら
みんなで楽しくパラダイス
香ばしい肉などの香りにさそわれて
体がかつてに動かされ
いますぐにでも口にはこびたいほどだ。

海と言ったらキンキンに冷えたアイス
アイスはいろんな味があつて
人それぞれの好きな味が選べるので
いろんな人にピッタリだ。

海と言ったら砂浜だ
サンダルなどで歩くといつもついてくる
まるでおとものような砂
でもはだしで砂浜を歩くと砂浜のちようどいい
痛みにいやされる
砂浜は良いところもあるのだ

最後に海といたら「素敵」だ。
こんなにもいいところがいっぱいあるものは
あまりない。
海それ自身がこんなにも輝いているのだ。
海にはいろんないいところがあり
人を笑顔にする力を海はもっている。
これからもこのさきも
海との関係を
大切にしていきたい
もつともつと人を笑顔にできるような
世界にしていきたい。

アイスを奪われた

東京都町田市立薬師中学校
二年生 前岡 里奈

トンビにアイスを奪われた
並んで買ったアイスクリーム
選びに選んだアイスクリーム
海を見ながら食べるべく
買ったアイスを奪われた

一度も舐めずに奪われた
音を立てずに降下して
掠めるように奪われた
気づけば手には何もなし
アイスの形に残されし
丸めた指に虚しさ募る

トンビにアイスを奪われた
浜辺で一人海を眺む
悲しさ抱えて海を眺む
空にはトンビが群れて舞う
どれがアイスを奪ったか
なんでアイスを奪ったか

そばで親子が狙われて
手に持つ唐揚げ奪われた
泣く子の手には何もなし
アイスの悔しさ蘇り
消える波見て虚しさ募る

海とは

大阪府寝屋川市立第九中学校
三年生 川崎 愛弓

海とは 記録である
ずっと私達を見守ってきた

海とは記録である
ずっと私達を見守ってきた

きつとこの場所には

それと同時に

砂浜に涙を染み込ませた人がいる

海とは

きつとこの場所には

私達の生き様である

慕う人と共に愛を誓った人がいる

きつとこの場所には

大切なものを探し求めた人がいる

きつとこの場所には

先に迷って心を揺らした人がいる

きつとこの場所には

たくさんの人の心が集まっている

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

水平線

伊藤 嶺

丸山薫先生の第一詩集のタイトルは『帆・ランプ・鷗』でした。海にかかわりがあるものが集って、ひとつの雰囲気を作り出していますね。そう、先生は海がお好きでした。この一卷で、詩人として世に認められたのです。

あなたにこの賞がさずけられたのは、何でも不思議に見る視線が、水平線のむこうがわにも、たくさんの町があつて、たくさんの事が今日も起きていると思つたことですね。水平線は一本の線なのに、輪っかのようだとあるのは、地球が球体だからと私は思うのですが、どうでしょうかね。

優秀賞

海の色

大林 法慎

海の色を虹と同じく7色にわけて表現しているところに作者の工夫を見ました。海の色は緑というところで、たくさん命の源と書いてあり、これは事実なので素晴らしい。

最近ではプラスチックなどのゴミで、魚も住めぬほどだという。海を汚さないようにしましょう。

カモメと海

赤沼 奏空

素直な詩です。何か考えていることがあるのですね。いつかその時がきたら、——自由に飛んでみよう——力強く生きましょうね。

佳作

海へ

平田 永愛

海をのぞいて、不思議な恐怖感があつて、こわかったとありますが、海はこわいと私も思っています。東日本大震災の時、あれほどたくさんものを、人を飲み込んでいったのに、今では何くわぬ顔をして、白っぽくれている。私は海しか見えない場所に住んではいるが、今では、半分カーテンをしめたままです。

海といったら

藤城 太希

本当にあなたがおっしゃるように、海との関係を大切にして、世界中の人たちが笑顔でいられるような世界にしていきたい——と誰もが望んでいますが、今ではまるで反対！何かいい方法はないのでしょうか。地球はこわれてしまいます。

アイスを奪われた

前岡 里奈

選びに選んだアイスクリームをトンビに奪われたのは残念！おまけに唐揚げを奪われた親子までがいる砂浜を想像して、無念！

海とは

川崎 愛弓

海よ、あなたを見る度に、陸の上の生きものがわたしには、かよわく優しくみえてしまうのです。すべてを飲み込みその底に沈めてしまう強い力。記録するところではない。その破潰力もすさまじい。あらゆるものを生み育ててきたといわれているのですが…。人間の生き方によって、このようにもおそろしい力を持つのでしょうか。



選者作品

私は言った

新藤涼子

海はあらゆるものを引きよせ
 自分を取りもどすものだった
 わたしたちの心のように
 行方も知れずさまよったりしない
 わたしたちはともすれば夢のなかに
 まっ逆さまに落ちてゆくのに

わたしは海を見ながら
 自分があまりに小さいことの不安に
 戦いた
 わたしたちはすべてを握ろうとするが
 海は握ったりはしない
 すべてを飲みこみその底に
 沈めてしまうものだった
 わたしが海にむかって駈けるとき
 波はその足を押ししたおし
 強い力で追いつめた
 その時 わたしは
 海にむかって言葉を投げつけたのだ。



詩集『ひかりの薔薇』より
 (思潮社刊) 一九七四年

【高校生の部】

選者

高橋

順子



「帆・ランプ・鷗」賞

海とおもいで

愛知県立時習館高等学校

一年生 水藤 祐希音

優秀賞

震える心と共鳴して

福岡県立八幡高等学校

一年生 川本 滯

語り場へ

千葉県立安房高等学校

三年生 和田 葵衣

佳作

決意と思い出

愛知県立小坂井高等学校

二年生 藍崎乃那華

海録音

愛知県立成章高等学校

三年生 柳川 尚輝

げんじつの海

国際基督教大学高等学校

二年生 豊田 隼人



入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

海とおもいで

愛知県立時習館高等学校
一年生 水藤 祐希音

今ははるか遠い海の向こうにいる君

頬をかすめる

潮風が運んでくれる

けれど

だから、ちっともさびしくなんか

ありません

君が おおきく広げた両腕は、
どこまでも続く

私はいつまでも 君を待ち続けます

君から もらったぬくもりは、
水平線が教えてくれる

足元の砂浜が伝えてくれる

君の いたずらっ子のような笑顔は、

さんさんと輝く

太陽が届けてくれる

君と であつたころから変わらない

心地の良い声は、

いつか 君がこの海をこえて
私のもとへ帰ってきてくれる その時まで

優秀賞

震える心と共鳴して

福岡県立八幡高等学校
一年生 川本 滯

深夜の海はしーんと静まり返っていて
どこからか魚の跳ねる音
遠くでないている虫たちのこえ
時折聞こえる誰かの竿を投げる音が
静寂を切り裂いていく
暗く深い深い闇にたなびく漁船のあかり
ゆらゆら、ゆらゆら、
きらきら、きらきら、
まるでその音で震えているようで
上を見ると
いつもの場所ではみられないくらい
星がたくさんちりばめられていて
かすかながらもやはりそこにいて
小さいながらも懸命に
きらきら、きらきら、

ふるふる、ふるふる、
どこか震えているようにも見えて
そんな中釣りをしている人々は
なんだか魚以上のすごいものを
暗くて、神秘的で、
どこか吸いこまれそうな海から
懸命に探しているように見えて
そう考えると、私も知らず知らずのうちに
ひろいひろい航海で
ひとりぼつんと棧橋で
自分の探す目的を、夢を、希望を
まだかからないかなーっと
ずっとずっと待ち続けているのだろうか

語り場へ

千葉県立安房高等学校
三年生 和田 葵衣

「今日も一日お疲れさま」
ちようど一番星が見えた頃。汗ばむ彼と交わす言葉。リュックいっぱいつめこんだ将来の知恵と着崩れた制服に身を包み
今日も私たちはざあざあ波たつ語り場へ

「そうそう、今日は学校で…」
彼の口から溢れる言葉は今にも魚に化けて泳いでいきそうなほど新鮮であつて。

ざぶん ざぶん
彼の海からは音がきこえた。まるで星屑いっぱいのみこんだのかというようにまぶしく光る海で…。

「今度は君の番、僕の耳にもきかせてよ」

ぴちゃん ぽちゃん
きかせてあげられるのは、私の頬を伝うくすんだ色の雫が落ちる音だけ。

落ちてゆく、雫だけが落ちてゆく。魚も光も見えないこの海に。

そんな波の音も光もないこの海の前で
きれいな琥珀色をした彼の言葉とともに身体中に温もりを感じたその瞬間
ざぶん ざぶん

私にもきこえた波の音。雫でおぼれた目をひたすらにこする。
私の海からも波の音がきこえた。まるで琥珀のみこんだのかというようにあたたかい色をした海で…。

「今日も一日お疲れさま」
月が顔だす午後五時頃。ひんやり冷たい彼の手からわずかな温もりを感じ
今日も私たちはざあざあ波たつ語り場へ

「そうそう、今日は学校で…」
「ねえねえ、私も学校で…」

佳作

決意と思い出

愛知県立小坂井高等学校
二年生 藍崎乃那華

四階の教室の窓の外
奥の方で青色が輝いている
太陽に照らされ、キラキラと
風に吹かれ、ユラユラと
まるで宝石箱のように

雨の日は怒り狂う
灰色に変色し、輝きを失う
ザーザーと音をたて、砂浜を襲う
まるで野生を生きる狼のように
光を受け、輝く姿を見て
皆「美しい」と評価した
灰色に変色し、輝きを失う姿は
知らないふりをして
輝く姿だけを見て
「美しい」
そう評価した

しかし私は違った
灰色に変色し、怒り狂い
野生を生きる狼のような
そんな姿を見て
「かっこいい」
そう評価した

海は「かっこいい」
その評価は理解されなかった
それでも私は
「かっこいい」と評価し続けた
それが私の
決意
それが私の
海との思い出

海録音

愛知県立成章高等学校
三年生 柳川 尚輝

噛み合い ちぎり
離れていく音の
訝 波打つように 進む
遠方の灘の
牙が白く当てられたら
鼓動とともに 高鳴る
足元にひらひらの尾が付く
ふたつは そこで生まれ 落ち合う
踏み込み もう一度だけ
かすかな景色を頼りに
糸のバス引き 小段に
あの子の懐へ
潜り込んでいく 最初から また
縮れる岩を頼りに
また 沈んでいく
爪の隙間に海面 見え
手先に伸ばせるほどの 狭間で

静かに繰り分けながら
色たちが点滅しないように
やさしく 柔らかく包む
目先 とらえた指先
雲の布をほどくようにして
流れになって 向かう
沖より
無数の海綿と 珊瑚
風の羽ばたくような壁面に揉まれて
わたし は海を認識する
神経が乱れていくけど
心はまだ温かいままで
だって 録音 したもの
寄せる波間 揺らぐ水槽 うねる海流
そのすべてが わたし の中に

げんじつの海

国際基督教大学高等学校
二年生 豊田 隼人

波は

冷房運転中のエアコン
を、

ガラクタにして
海に戻ってゆく

ここは

内陸に位置する街

スマートフォンに

セブン・シスターズが

並んでいる

海は

わたしの眼下にある

高いところは

苦手でした、

やっと

右手を平行にできて

海を触る

塩辛い。

血流がよくなつて

画面を見つめる、

海の唯一の性質は

げんじつであることです。

げんじつに色があることは

人間の奇跡なんだ

海拔四〇メートルの

ここにも

その奇跡は届いている

空は青く ひとりぼっちでいる

崖は白く 削れてゆく

海は青く 爛爛としている

げんじつの海は

そこにある

選 評

「帆・ランプ・鷗」賞

海とおもいで

水藤 祐希音

「君」と「私」の間には海がある。海を見ながら作者は「君」のことを考える。「君」は「私」に水平線のように大きく腕を広げる。腕を水平線にたとえるのは素敵です。砂浜のぬくもりのように温かい人だ。潮風が運ぶ心地よい声。そのように「君」と海を半ば同化している。

しかし海は「君」ではない。じつさいの「君」が「私」のもとに帰ってきてくれることを望んでいる。展開がみごとです。「さびしくなんかありません」と言えるのは詩の力でしよう。ここまで自分の心と、おそらく繰り返し対話してきたであろうことに感心しました。

優秀賞

震える心と共鳴して

川本 滯

釣り人たちが「魚以上のすんごいもの」を釣り上げようとしていると思ひ、さらに作者はその光景に自分のすがたを重ね合わせている。見えないものを見ようとしている。詩を書く楽しさをすでに知っているようです。

語り場へ

和田 葵衣

学校帰りに海辺の「語り場」で出会う「彼」と「私」。それぞれの心の中の「海」をいきいきと、また丁寧に描写している。書きたいことがあるから書く。それが素直な流れを生んでいます。

佳作

決意と思い出

藍崎乃那華

海は「評価」されるものだろうか。評価とは価値を判断すること。海は人の考える価値を超えるものであるはずだ。

海録音

柳川 尚輝

多彩なイメージの散乱に作者自身は魅力を感じているようだが、詩は他の人への呼びかけでもあると思う。

げんじつの海

豊田 隼人

「げんじつ」とか「奇跡」をキーワードにしたかったら、もっと言葉の意味に沿って考えてほしい。

選者作品

わたしの中の海

高橋順子

海はどこも

わたしの生まれた千葉の九十九里浜も

フランスのマルセイユの港も

豊橋の前芝海岸も

同じ匂いがしている

陸地がどこも同じ匂いでないのは

わたしが陸の人だから

きつとわたしが海の人だったら

海から顔を出して鳥影をみとめたとき

どの陸地にも同じ匂いを

嗅いだかもしれない

マルセイユの港の市場に

ボージュー(美しい目)という目の

大きい魚が売られていた

「マダム」と塩辛声の男に呼ばれた

塩辛声も海によってつくられた



彼の中に海があるのだ

わたしの目はすでににごっているが

十分に海を見てきた目である

海のなつかしさ、さみしさが

親類の魚のようになっている

わたしの中を泳いでいる



丸山薫の略歴と業績

明治三十二年 六月八日大分県生まれ。

明治三十八年 内務省官吏の父の転勤で京城（ソウル）へ移住。

明治四十四年 父の死により母方の祖父の地、愛知県豊橋市に移る。

大正 七年 東京高等商船学校（現・東京海洋大学）に入学。病気のため退学。

大正 十年 第三高等学校（現・京都大学）に入学。

大正 十五年 東京帝國大学（現・東京大学）に入学。

・昭和元年 『新思潮』同人となる。

昭和 三年 高井三四子と結婚し、詩活動に専念。

昭和 九年 堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』を創刊。

昭和 十年 第一回文芸汎論詩集賞を受賞。

昭和 二十年 山形県西川町岩根沢に疎開。岩根沢国民学校代用教員を務める。

昭和二十三年 疎開先の山形県西川町岩根沢から愛知県豊橋市に戻る。

昭和二十四年 愛知大学講師、後に教授となる。

昭和二十六年 中部日本詩人連盟結成、委員長となる。後に中日詩人会に改組され、引き続き会長。

昭和三十二年 第十回中日文化賞を受賞。

昭和四十二年 旧四季同人を中心に詩誌『四季』を復刊。

昭和四十九年 愛知県豊橋市の自宅で永眠。

丸山薫の作品には、第一詩集『帆・ランプ・鷗』をはじめ『幼年』『物象詩集』『青春不在』『連れ去られた海』『蟻のいる顔』など十六冊の詩集と、短編小説集『蝙蝠館』、『エッセイ集』『蟬川裸記』、その他多くの詩選集『丸山薫詩集』がある。

没後、昭和五十一年に『丸山薫全集』全五巻が刊行され、さらに平成二十一年は、丸山薫の生誕百年、没後三十五年に当たするため、全六巻からなる『新編 丸山薫全集』が刊行された。

豊橋市高師緑地には丸山薫詩碑が発起人桑原武夫氏らによつて建立され、また、愛知大学豊橋キャンパスには、丸山薫作詞の学生歌の詩碑が愛知大学短期大学同窓会によつて建立されている。その他、山形県西川町には詩碑が建立され、丸山薫記念館がある。



丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞 作品集
令和3年度 第1回 「海」

令和四（二〇二二）年一月二十二日 発行

発行 豊橋市文化・スポーツ部「文化のまち」づくり課

〒四四〇一八五〇一 豊橋市今橋町一丁目

電話 〇五三三二一五一―二八七四

FAX 〇五三三二一五六―一〇八一

E-mail bunka@city.toyohashi.lg.jp

印刷所 (有)伊藤印刷

✳表紙・裏表紙イラスト 佐野妙

